

る。松沢氏は「こんな時、決して人だけが特別な動物ではないのだなあと思います」と綴っている。

私はこうした動物たちの記録を読んだり、ご近所の犬や猫、小鳥に、ちよつと遊んで貰つたりしている時が一番人間らしい気持ちになる。人間らしいと

いうより生きものらしいという方が適切かもしれない。「僕らはみんな生きている」。動物たちの間で心地よいのも、子どもたちの間で心地よいのも、私にとっては等しくそういうことなのだと思う。

(お茶の水女子大学)

## 夏休みに旅を思う

金山 優美

夏休みがやってくる。この時期、まとまった休みが取れ、旅行を計画されている方も多いことと思う。

そんなわけで私がご紹介するのは、元日本航空のパイロットである田口美貴夫氏書いた『機長の一日』、『機長の七百万マイル』(講談社)と

いうエッセイ集である。

国際便の機長として、世界中を飛び回ってきた著者が、これまで経験した様々なエピソードをまとめたものだ。『機長の二万日』のほうが先に出版され、売上は七万部を突破したと聞く。続編の『機長の七百万マイル』も発刊二ヶ月で増刷されていて、どちらも人気があるようだ。

機長やスチュワーデスの書いた本というのは、他にもいくつか出版されているようだが、私はこの著者のものが面白いと思った。文章も読みやすく、気軽に読める。

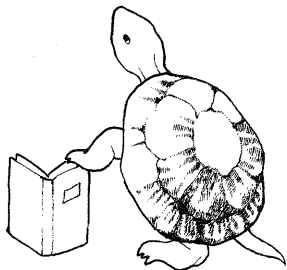
どちらの本も、内容は飛行機の操縦にまつわることから、機内のトイレや食事に関わる意外な話など、乗務員ならではの裏話が盛りだくさんで、楽しめた。

著者は操縦歴三十六年で、浩宮さまをはじめVIフライトの経験も多いが、搭乗客の思い出で面白

いのは、故・大屋政子さんの話である。あの奇抜なファッションに関わることや、乗務員が揃ってバレエ観劇に招待されたことなど、エピソードは幅広い。

その他フライト先でのアクシデントや、謎の物体との遭遇（もちろん高度数万メートルの空中で、である）などの不思議な体験もあつて、読者を飽きさせない。

また、機上から見える、アラスカやシベリアの大自然の記述も心をひかれた。空から見おろす高峰マツキンレーや冬のオーロラなど、コックピットからの絶景に息をのむ話には、（ああ、私もそんな景色を見



てみたい！」と、うらやましく思う限りである。

しかし同時に、安全なフライトのために並々ならぬ努力をされている様子も、随所に窺える。私たちの知らない所で、こんな苦労があるのだなあと驚かされる。

高いビルのような積乱雲をかすめたり、機器のトラブルのためにヒヤリとさせられたり……。そんなこともきつと、著者に限らず、多くのパイロットにとつて一度や二度ではないのだろう。

私は実家が北海道なので、よく飛行機を利用する。空港で搭乗を待つ間、私は飛行機を見るたびに思うのだが、こんな大きな塊がなぜ飛ぶのか、素朴に感心せずにはいられない。それを「飛ばす」立場の多くの方々が、この著者のように日夜、仕事に精励されておられることに、感謝の念を覚える。

とくに乗務員というと、きりりとした制服姿や華やかなイメージが先に立つが、著書からは、厳しい

職人魂のようなものが感じられた。

そのこだわりを知ると、手荷物検査など手続きのわずらわしさや、きゅうくつな座席ベルトも、安全な旅のためなら協力を惜しみません、という気持ちにさせられる。

というのも、機内では「お客様」がらみのトラブルもあつて、乗務員もいろいろ大変だなと思うくだりが出てくる。いわゆる「困った乗客」というのは、不慣れなことが原因の場合もあるのだろうが、乗客のマナーというものも考えさせられた。

例えば、こんな話が載っていた。

コックピットで、原因不明の計器トラブルが発生する。懸命に調査するがどうしても回復できない。ふと思ひ立って、客席で携帯電話を使っていないか確認させると、案の定それが原因だったという話。

あるいは、乗り継ぎ便の設定に時間の余裕がなく、かけこみ搭乗(?)で、出発を遅らせてしまふ

乗客や、それまで悠然と座っていたのに、ベルトのサインがついたとたんにトイレに行きたくなり、無理やり席を立つ乗客……等々。

飛行機に乗るということは、いろいろ制約も多くて不便なこともあり、それだけでなく乗務員のお世話になる。何よりも乗客の安全をと心を砕く人たちに、必要以上に面倒をかけてはいけないなあ、と思ったりした。

今年の夏も、たくさんの人々が国内、国外を問わず旅行に出かけることだろう。空港の混雑も、またニュースで報じられるに違いない。

ご紹介した二冊については、エッセイとして面白だけでなく、飛行機で旅する場合のちょっとしたアドバイスも入っている。飛行機に乗る予定があるなら、ぜひ読まれてみてはどうだろう。どうせ乗るなら、賢く利用したいという方には、おすすめであ

る。今まで知らなかった、新たな発見があるかもしれない。

もちろん、そんな予定のない方でも、十分楽しめる本である。いつか旅する日を夢みて読むのもいいと思う。

日常から離れ、違う世界に身を置くことが旅の楽しさだとするならば、読書もまた旅のような側面を持つている。この本に限らず、読書することで、しばし心だけは旅に出られるのではないだろうか。

どこにも出かけずとも、ゆっくり、のんびり、本のページをめくる——それも、すてきな時間だと思う。

どうぞ、皆様よい夏休みを……。

(町田市在住)